

顔学会ウラの力オ

～学会運営に携わる委員会のご紹介～

連携チーム

連携チームでは、支部や公認サークル、関連学会との連携を通して、顔学および顔学会の認知度向上を目的とした活動を行っています。メンバーは寺田員人先生（日本歯科大学）、森島繁生先生（早稲田大学）、松永伸子さん（美人画研究会）および私の4人からなり、他のチームと同様に専門分野の異なるメンバーで構成されています。



活動内容は支部や公認サークルの運営、研究会や交流会の実施、関連学会と合同でのシンポジウム開催など多岐にわたります。メンバーが個々に活動することもあります。チームメンバーや理

事会とも連携して、著名な先生に講演を依頼したり、バラエティ豊かなワークショップを開催したりと、自分たちが面白いと思う企画を自由に実施することができます。例えば、デパートの売り場を一区画お借りして、普段の学会活動では接することのない子供を対象としたワークショップを開催したり、参加者有志が制作した美人画を持ち寄って、一般の方にもご覧いただける展示会を開催したこともありました。2015年には、顔学会の創立20周年を記念して関西支部の立ち上げにも関わり、翌年には第1回研究会を開催しました。これらの企画を通してできた新たなつながりは、フォーラム顔学での発表や展示、共同研究や新たな企画の開催など、さまざまに発展しています。

連携チームでは学会外へのアウトリーチ活動を通して、会員の皆様にも新たな発見をお届けしたいという思いで活動を進めております。少しでもご興味をお持ちいただけたら、ぜひ一度ご参加いただければと思います。イベントの開催情報は顔学会のHPからご確認いただけます。

日本顔学会 理事補佐（連携担当）
立命館大学 瀬尾 昌孝

図書紹介



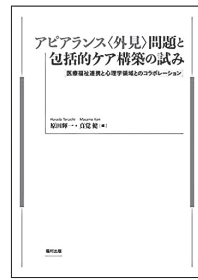
損する顔得する顔
山口 真美 著

ISBN-10 : 4023317322
ISBN-13 : 9784023317321
発売 : 2018年10月
定価 : 1,400円 (本体)
発行所 : 朝日新聞出版



第一印象の科学
なぜヒトは顔に惑わされてしまうのか？
アレクサンダー・トドロフ 著

ISBN-10 : 4622087626
ISBN-13 : 9784622087625
発売 : 2019年1月
定価 : 3,800円 (本体)
発行所 : みすず書房



アピアランス〈外見〉
問題と包括的ケア構築の試み
原田 輝一、真覚 健 編

ISBN-10 : 4571240686
ISBN-13 : 9784571240683
発売 : 2018年5月
定価 : 3,000円 (本体)
発行所 : 福村出版



アピアランス〈外見〉
問題介入への認知行動療法
アレックス・クラーク、アンドリュー・R・トンプソンほか 著

ISBN-10 : 4571240724
ISBN-13 : 9784571240720
発売 : 2018年12月
定価 : 7,000円 (本体)
発行所 : 福村出版

編集委員会だより

ニュースレターのデジタル版が顔学会のホームページから閲覧できるようになりました！今後は学会員以外の方々にも公開し、顔関連の活動を広くアピールしていきたいと思ひます。皆様も、学会紹介や広報などでニュースレターを積極的にご活用ください。

平成最後となる今号のNow the Faceでは、元号の変わる節目をとらえ、「平成の顔」をとり上げました。「令和」も引き続き、楽しんでもらえる紙面をお届けできるよう、メンバー一同頑張っています。読者の皆様からのご意見・ご感想も随時募集しております。

また、次回の編集委員会はオープン開催を試みます。企画を持ち込みたい、雰囲気を知りたいなど、興味のある方はぜひいらしてみてください。

一緒に盛り上げていきましょう！

(中洲 俊信)



2019年2月4日
編集委員会@資生堂銀座ビル



メンバー
募集中！

イベントなどでニュースレターを配布・広報いただける場合は、事務局までお知らせ下さい。

発行：日本顔学会 © 編集・製作：日本顔学会 J-FACE 編集委員会 日本顔学会事務局
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 バレスサイドビル 9F 株式会社毎日学術フォーラム内 TEL : 03-6267-4550 FAX : 03-6267-4555

発行日：2019年4月19日 *無断転載を禁じます。

J-FACE NEWS LETTER

日本顔学会ニュースレター 69号

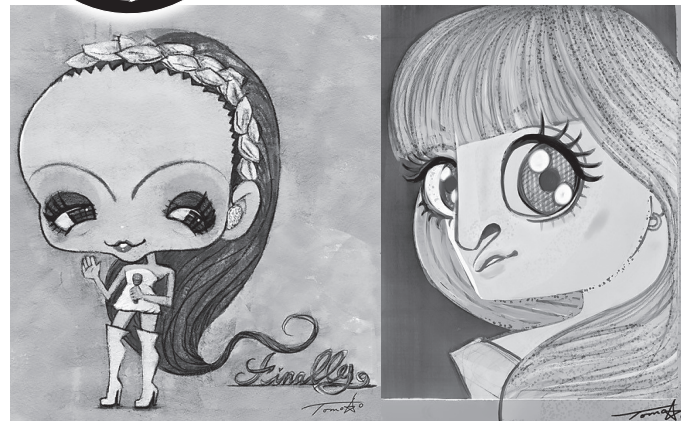
19 APRIL 2019 Vol.69 <http://www.jface.jp>

Contents

- P1. Now the Face
- P2～3. 「イブニングセミナー」と「顔学連続講座」報告／美人画研究会の活動報告／化粧文化研究者ネットワーク研究会報告
- P4. 顔学会ウラの力オ／図書紹介／編集委員会だより



第52回 今、を感じさせる
KAOの人物を紹介する



■脱げない顔から着替える顔へー平成の顔

平成が始まった頃、まだ女性たちの眉は自然に太く、唇だけが鮮やかなピンク色で彩られていた。目元のメイクもあっさりとマスカラを塗る程度だった。バブル時代の顔は、今から振り返るとそれほど技巧的ではなく「ナチュラル」で、昭和を引きずっていたのだ。カラーリングも、カラコンも、プチ整形も、コスメアプリも、まだ何もかもそこには加えられていなかったからである。

そんな時代にマンガ家の岡崎京子は『ヘルタースケルター』という作品を発表し、全身整形によって美しく生まれ変わったヒロインの物語を描いた。食欲に美を求め、身体改造に励む女性の姿—それはまるで、その後すぐに訪れるコスメの時代を予見したかのようだった。

コスメの時代の幕開けはスーパーモデルとともに始まった。パリやミラノのコレクションで活躍するトップモデルたちが、女性たちの目標となった。普通の女の子が「ナオミになろう」とエステに通い、「私、脱いでもすごいです」と自らの身体を誇示するようになったのだ。この時代の顔を代表するのが、昨年引退した安室奈美恵である。細眉のスーパーモデルと茶髪

にガングロのコギャルを掛け合わせた彼女の顔や、厚底ブーツにミニスカートという独自のファッションを真似する女性たちは、アムラーと呼ばれ社会現象にもなった。

プリクラという機械の登場で、新しいコミュニケーションも生まれた。自分の顔がシールになり、交換されるという顔によるコミュニケーション。「写交性」が求められる時代がやってきたのである。「写交的」な顔になるためには、大きな目が欠かせない。

そこで次に女性たちが憧れたのは、リアルな少女マンガのヒロイン顔の浜崎あゆみであった。非現実的な大きさの目を持った歌姫は、瞬く間に「美のカリスマ」となり、目力という言葉が流行らせた。目力をアップさせるには、もうマスカラの三本重ねでは物足りない。つけま（つげ）、カラコンにマツエク、そしてプチ整形。大きな目になりたいという思いは身体改造をますますエスカレートさせていく。

メディアの発達も拍車をかけた。カメラ付きケータイの普及は、いつでも、どこでも、撮られる顔を人々に求めるようになった。どんなときでも、私は被写体となり、SNSで拡散されていく。リアルな顔よりも、ネット上で与えるイメージとしての顔の方が、影響力を持つようになる。

平成も終わりに近づいた頃、ざわちゃんという名の、メイクを駆使してあらゆる人物になりきるタレントが人気となった。ざわちゃん自身の顔ではなく、誰にでもなれることが評価されたのだ。それぐらい、顔を着替えることが価値を持つようになったのである。

女性たちは「コスメアプリ」などと呼ばれるスマホの機能を使って、自分の顔で遊びだした。あっという間に「デカ目」のヒロイン顔になったり、動物になったり、逆に「変顔」になったりして、顔で遊ぶ時代がやってきた。それは、顔がずっと人格と結びつけられていたことに対する反動なのだろうか。

かつて、詩人の井坂洋子は「服のように簡単に顔を脱げなくて苦しい」と綴った。確かにその時代の私たちはまだ、顔を脱ぐ術を持たなかった。平成という時代の間に、私たちは服のように顔を簡単に脱げるようになったかのように思える。それが、解放となるのか、違う苦しみを生むことになるのか、新たな顔とのつきあい方を考えるのが次の時代の課題であろう。

(文：米澤 泉、イラスト：小河原 智子)

「イブニングセミナー」と「顔学連続講座」報告

第55回イブニングセミナー

「古代エジプトの壁画 横向きの顔はなぜ？」

日時：2018年7月25日 講師：村治 笙子 先生

場所：中央大学駿河台記念館

顔は横向きで目と上体は正面向き、下半身はひねっている不思議なエジプトの壁画と絵文字ヒエログリフは何を語なのか、冥界の神と仲介者としてのファラオ（王）とは、など古代エジプトの壁画の秘密に関して豊富な画像とともに詳細な解説をしていただきました。



HC塾（第90回）・顔学連続講座（第4回）

「阿修羅の顔とキティの顔」

日時：2018年11月10日・14日 講師：原島 博 先生

場所：ルノアール 池袋西武横店 会議室

2009年に東京国立博物館で「阿修羅展」が開催され絶大な人気を博した時に、原島先生は「阿修羅の顔の謎を解く」として、阿修羅の3つの顔は少年が青年へと成長していく変化を表現しているという画期的な解説をされました。今回はそれに加えて「可愛いアニメ顔とキティちゃんの顔の変遷に関する顔学的考察」という興味深い解説をいただきました。そして「阿修羅とキティ」の共通点は「見方によって変化すること、見る人の「自分自身の心を映している」こと、という結論に導かれました。

美人画研究会の活動報告〈2018年7月～2019年2月〉

■第15回（アカデミック）7月7日 拓殖大学文京キャンパス

○第1部／以下のテーマで研究発表をしていただき、意見交換を行いました。

・畑江麻里氏

「複製浮世絵師・高見澤遠治と江戸以降の美人画」

・岩崎達也氏

「東郷青児の美人画―東郷式美人画の確立と発展の歩み」

○第2部／以下のテーマでご講演いただきました。

・稲垣進一先生（国際浮世絵学会常任理事）

「歌麿の色彩美―世界で一番美しい歌麿はこれだ！」

○第3部／稲垣進一先生所蔵の貴重な浮世絵を間近で鑑賞させていただきました。

■第16回（クリエイティブ）8月26日 森下文化センター

○第1部「粋な美人とはどんな顔？」

まずあらかじめ用意した女優さんの写真から美人画を描き、

HC塾（第91回）・顔学連続講座（第5回）

「いい顔とは何か？―そのつくり方―」

日時：2018年12月1日・5日 講師：原島 博 先生

場所：ルノアール 池袋西武横店 会議室

顔は進化の歴史とともに変わってきた、いまでも変わっている、職業や化粧によっても変わる、言いかえれば顔はえられる、ということから、人はなぜ化粧をするのか、などのお話へ。そして「いい顔とは何か？」つまり「顔は健康・コミュニケーション・エネルギー・気分・イメージ」であるというお話へ。最後は「いい顔になるための顔訓13か条」（1）自分の顔を好きになろう、から（13）いい顔、悪い顔は人から人へと伝わっていく、についてのご説明をいただきました。

HC塾（第92回）・顔学連続講座（第6回）

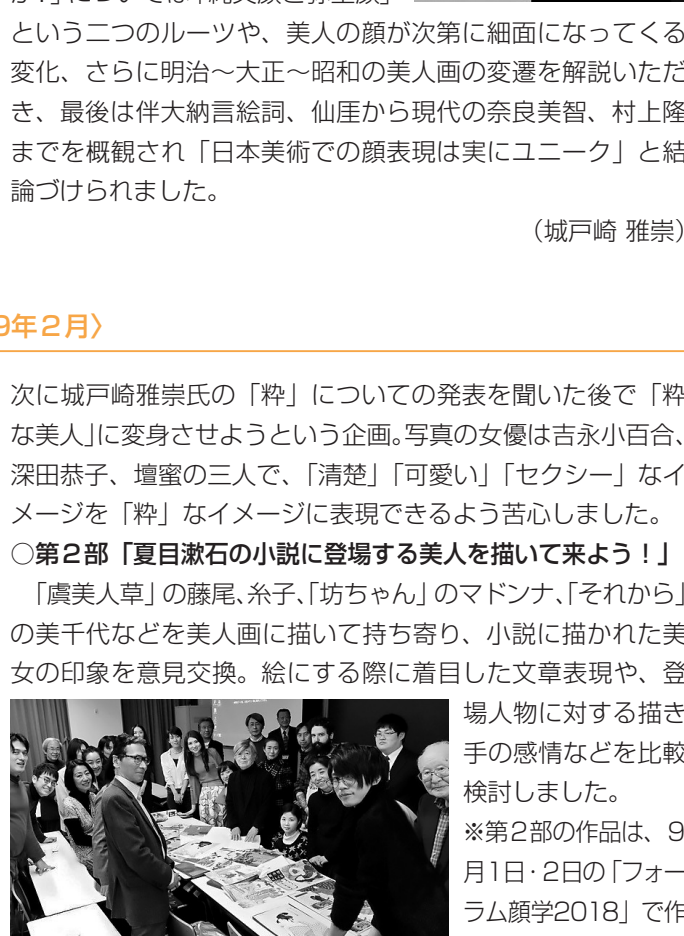
「日本美術と顔―それはどう表現されてきたのか？―」

日時：2019年1月9日・12日 講師：原島 博 先生

場所：ルノアール 池袋西武横店 会議室

まず日本美術を4つの「び」=「みやび（雅）かび（華美）わび（侘）あそび（遊）」で集約された後、仏教美術、絵巻物、運慶に代表される彫刻、肖像画、狩野派や琳派、浮世絵など日本美術史を概観される中で「日本美術の顔」についての様々な変遷を辿られました。「日本人の顔はどう表現されてきたのか？」については「縄文顔と弥生顔」という二つのルーツや、美人の顔が次第に細面になってくる変化、さらに明治～大正～昭和の美人画の変遷を解説いただき、最後は伴大納言絵詞、仙厓から現代の奈良美智、村上隆までを概観され「日本美術での顔表現は実にユニーク」と結論づけられました。

（城戸崎 雅崇）



第18回（2019年2月16日）の様子

次に城戸崎雅崇氏の「粋」についての発表を聞いた後で「粋な美人」に変身させようという企画。写真の女優は吉永小百合、深田恭子、壇蜜の三人で、「清楚」「可愛い」「セクシー」なイメージを「粋」なイメージに表現できるよう苦心しました。

○第2部「夏目漱石の小説に登場する美人を描いて来よう！」

「虞美人草」の藤尾、糸子、「坊ちゃん」のマドンナ、「それから」の美千代などを美人画に描いて持ち寄り、小説に描かれた美女の印象を意見交換。絵にする際に着目した文章表現や、登場人物に対する描き手の感情などを比較検討しました。

※第2部の作品は、9月1日・2日の「フォーラム顔学2018」で作品展示しました。

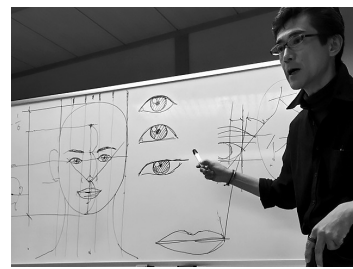
■第17回（クリエイティブ）11月25日 森下文化センター

○第1部「福笑いdeベッピン誕生！」

まず卵型の顔土台の中にあらかじめ用意した目鼻口のパーツを配置して自分のイメージする美人の顔を作成。次に東観崎嶸氏の「顔の黄金比率」についての発表を聞いた後で、もう1枚の顔土台に黄金比率を意識してパーツを貼った美人顔を作成。楽しく福笑いをしながら、配置だけで顔の印象が相当変化することがよくわかりました。

○第2部「クレオパトラを描いて来よう！」

世界3大美女の一人、クレオパトラを美人画に描いて持ち寄り、どんなイメージを絵にしたのかを話し合い比較検討。今回は楊貴妃を描いてくることに決めました。



化粧文化研究者ネットワーク研究会報告

第48回「日本におけるアロマセラピーの現在」

日時：2018年9月14日 14：00～16：30

講師：市邊昌史先生 国際アロマセラピー科学研究所理事

場所：大阪樟蔭女子大学 小阪キャンパス

講演者の市邊先生は、日本におけるアロマセラピーの発展に大変ご尽力された方であり、日本のアロマセラピーの歴史、文化を知る第一人者である。

もともとアロマセラピーとは、アロマ（芳香）とセラピー（療法）からなる造語で1930年代にフランス人の化学者ルネ・モーリス・ガトフォセによって命名された。よって、フランスでは香りによる療法という意識が強いが、日本では90年代から一般化しはじめ、独自の進化を遂げていく。

アロマセラピーが日本に入ってきた頃はまだバブル期だったそうだが、その後90年代の半ばにバブルがはじけ、ストレス社会が意識されるようになり、「癒しブーム」とともにアロマも世に浸透していった。

それにともない女性たちの間では、アロマセラピーを学びたい、資格を取って、アロマセラピストになりたいという思いが広がり、アロマ検定やアロマセラピストを養成するスクールが開校され、アロマ教育がさかんになった。市邊先生によれば、女性の自立志向、資格をとり手に職をつけたいという熱意がこの発展につながったとのことだが、なかなか出口がないことから、近年は教育市場が小さくなってきているそうだ。

一方で、アロマ全体の市場規模は2015年には、3337億円に達し、現在ではオーガニック志向の高まりなどを受け「アロマ化粧品」が市場を牽引するようになった。確かに、ロクシタンをはじめ、ニールズヤードやコスメキッチンなど現在の私たちの周りにはアロマ化粧品が溢れている。香りに対する消費者の意識もこの20年で劇的に高まり、アロマデューザーを筆頭に空間を香らせることが流行している。

物質的な豊かさよりも「居心地のよさ」を求める社会において、今後アロマセラピーの重要性はますます高まるのではないだろうか。「香りは



記録に残せないが、記憶に残せる」という市邊先生の言葉が印象的だった。まるで、ブルーストのマドレーヌのように。

（米澤 泉）

■第18回（アカデミック）2月16日 拓殖大学文京キャンパス

○第1部／以下のテーマで研究発表をしていただき、意見交換を行いました。

・畑江麻里氏

「明治の美人のファッション―楊洲周延を中心に」

「歌麿《姿見七人化粧》と複製浮世絵」

・成瀬康人氏

「内面美の探索Ⅱ―絵画が語る内面美の種類と特徴」

○第2部／稲垣進一先生（国際浮世絵学会常任理事）にご持参いただいた貴重な浮世絵と複製を手にとって比較させていただきます、説明を聞きました。

※「英泉の浮世絵」は次回になります。

○第3部／岡部昌幸先生所蔵の和洋の美人画・人物画の展示を、ご説明いただきながら鑑賞しました。

（松永 伸子）

第49回「“きれい”による生活文化の創造～“洗う”・“装う”化粧史を中心に～」

日時：2018年12月8日 14：00～16：30

講師：今井 健雄先生 （株）花王 スキンケア研究所

場所：資生堂 汐留ビル

この回では、化粧品の製品開発、カウンセリングなどに従事されてきた今井先生をお招きした。洗浄と化粧の歴史を交互にたどりつつ、水資源とそのビジネスの動向まで言及する幅広い視野からの刺激的な内容であった。

講演は、人類創生から入浴が重要な行為で儀礼でもあったことから幕を開け、身体を洗い、洗髪と化粧する歴史に絞って進められた。鳥獣戯画でも、川で身体を洗っている猿たちをウサギがひしゃくで水をくんで手伝う場面が描かれていることにわかるように、湿度が高い日本では昔から身体を洗うことが重要で、鎌倉時代には京都に銭湯が出現し、近世には「しゃぼん」（石鹸）が伝来した。日本人は基本的にきれい好きで、明治時代に入ると官立工場で石鹸の製造が始まり、明治10（1877）年には全国に13工場ができて需要を満たすほどの規模になったそうである。

質疑応答では、「日本男性の汗臭いのがかっこよいという価値観はいつからか？」との質問に、「高校生が制帽に卵や靴墨を塗って、テカテカさせた。われわれの世代はそうですね、原島（博）さん」と代表の北山晴一先生から思わぬ話が飛び出した。今井先生によると、洗髪は、平安時代に年1回、江戸時代には月1、2回、昭和30年代に回数が増加しはじめており、第二次世界大戦後には男性の洗髪回数は女性なみになっている。しかしながら、毎日洗髪することが当たり前になったのは「朝シャン」という言葉が流行した90年代半ばであり、80年代で洗髪は20代の女性でも週2、3回だったという。日常生活ではシャンプーの使用量が最も多くなっていることなど、理系の研究者らしく具体的なデータを挙げるスタイルで非常にわかりやすいお話であった。

日本だけで水を節約するのは意味がない。「21世紀は水の世紀」であり、人口増加や気候変動により水資源の使用バランスは2025年から破綻し、2050年から戦争がおこる可能性があるとの指摘は、「文明度と水の使用量が関連する」との言葉があった直後だけに、現在の生活様式がこのままでよいかと参加者一同が振り返りたくなる幕切れとなった。

（山本 芳美）

